モニターではどうしても伝えきれないものがある。
物質だから感じる感動や驚きはたくさんある。
表現と印刷手法が融合して、初めてポスターは形になる。

融合するポスター

Integrated Collage

Creator

えぐち りか Rika Eguchi

Printing Director

長谷川太二郎 Daijiro Hasegawa

Profile

アートディレクター、アーティスト／株式会社電通
1979年北海道生まれ。広告、プロダクト、絵本などを幅広く手がける他、
アーティストとして国内外で作品を発表。主な仕事に「PEACH JOHN2016」、
ソフトバンク「PANTONE6」などのグラフィックとCM、PARCO、Laforet、AKB48、
CHARA、木村カエラ等のアートワーク、絵本「パンのおうさま」がある。
D&AD（英国）金賞、グッドデザイン賞、JAGDA新人賞、岡本太郎現代芸術大賞優秀賞、
他多数受賞

印刷手法で新しい表現を

ふだんの仕事は広告をつくることです。そこでのポスターは主に、見る人に瞬時に情報を読み取ってもらうための媒体だと考えてやっています。でも、今回は条件が「印刷を使って」のみです。それならば情報を伝えるものとしてだけではない、ポスターの新しい在り方を考えていきたいと思いました。

それが出発点だったのですか？

もう一つ、テーマが「Crossing」なので、いろいろな印刷手法をかけわせて融合していこうとも思いました。グラフィックポスターは私にとっては絵画と同じようなもので、壁に貼ってずっと眺めていたいと思わせてくれるものです。まず、壁に貼って楽しんで、そして、時間が経てばまたなにか新しい面白さや発見が見えてきて楽しめる。家にも好きなポスターを飾っていますし、自分が作るものもそんな風に楽しんでもらえるものにできたらと思いました。何度も見たくなるような、思わず近づいて見入ってしまうようなものを印刷の技術をいろいろ用いながら実現したいと考えました。

最初はどんなものを考えましたか？

「○○という印刷手法がなければ表現できないビジュアルがやりたい」と考えました。初めに、いつもと同じようにいっぱいアイデアを考えました。たとえば、立体的に盛り上がるような印刷をして押し花のようにペチャンコに潰すとか、ビジュアルから毛が生えているように見える印刷とか、変なことをたくさん。

それは確かにビックリしますね。

最初はそんな感じで、無理難題ばっかり言っていましたね。「印刷手法がないと、ビジュアル化できない企画にしたいから、なんとか実現できないか」と。でもPDの長谷川さんも簡単に「できない」とは言わないのです。「こうすればできるかな」「あの技法をこう使えばどうだろう」と一生懸命考えてはアイデアを出してくれたし、一緒に作っていく感じがとても楽しかったです。

実現に向けてトライアルし続けて

そうして見つけたのが「剥離する印刷」というアイデアでした。時々ありますよね？ 油絵の下からもう1枚絵が出てくることが。古い絵の下に実はもう1枚、別の絵が隠れていたという話を聞くことがあるでしょう？ それで、長いこと壁に貼ってあったポスターが自然にこすれたり折れたりするうちに、下から何か出てきたら楽しいだろうな、と思って。触れると印刷が徐々に剥がれて、下から別のビジュアルが出てきて上の絵と混ざっていくようなことができないかな、と。

そして実際にトライアルした？

はい。いろいろトライアルをしてくれました。でもこれがかなり難しくて。「これなら実現できそうです」とたどり着いたのがスクラッチのように、上の絵を削り取っていく手法でした。でも、私の考えていたものとちょっと違う気がして。

作りたいものとは違うと？

「ポスターをスクラッチするのは無理があるな」と思いました。だって、壁に貼ってあるポスターをわざわざ削るのって、ちょっと不自然ですよね。スクラッチで作品を作るなら、テーブルで向き合って楽しむものの方がいいし、それならポスターよりももっと小さな、雑誌のような媒体の方が向いています。自分が思うポスターの在り方としては違うと判断しました。

モザイクを質感表現で

そこで再度、アイデアを考えることにして、それまでに実験してきた印刷物を眺めていたら、それ自体がとても面白いのです。いろいろなインキが作り出したテクスチャーがあって、手触りも光り方もそれぞれ違っていて。そこから、いろいろなテクスチャーを集めて1枚の絵を作ってみようというアイデアが生まれました。光るもの、マットなもの、ざらざらしたもの、ぼこぼこしたもの…、印刷技術で作ったテクスチャーをパッチワークのように集めてモザイクを作り、そのモザイクで女性の身体を表現することにしました。本物に負けないくらい美しいポスターを作ってみようと。

モザイクにしたのはなぜですか?

キュビズムの絵画のようなモザイク画に面のディテールをプラスして、立体感のあるビジュアを作ってみたいと思ったからです。テクスチャーに差をだすことは印刷でしかできないことだし、その感じが面白いのではないかと。モザイクはいろいろな人が作品で使っている印象があるので、普段はモチーフとしてあまり使わないのですが、いろいろな手法を使ってマチエールを作るという企画にはピッタリな気がしました。テクスチャー自体がモザイクになっていくという感じですね。

モザイクは少々秘密めいた感じも…。

以前、チャリティ展でアロハシャツを作った時、ハイビスカスの雌しべと雄しべだけにモザイクをかけたことがありましたが、それだけで「考えすぎ」という印象になるところが面白いと思いました。

モチーフは裸婦ですね。

部分的にモザイクをかけたものはよく見かけますが、全体がモザイクでできていると、「どんな人だろう」「かわいいのかな」「目は大きいのかな」と、いろいろ想像が広がっていくのが、ストレートな表現ですが、面白く見えるのではないかと思いました。なにより面白かったのは、周囲の人たちの反応でした。デスクで作業をしていたら、普段は通り過ぎるだけの人たちまで「何作っているの?」と声をかけてきたのです。やっぱりモザイクは人の「見てみたい」という気持ちを刺激するのかもしれませんね。

印刷手法は絵の具のようなもの

実は、まだ私自身も完成品を見ていないので、今はとても待ち遠しいのです。モニター上で制作していた時は単なるモザイクでしかなかったものが、印刷でどんな風に変わるのか、すごく楽しみにしています。

印刷によって完成するわけですね。

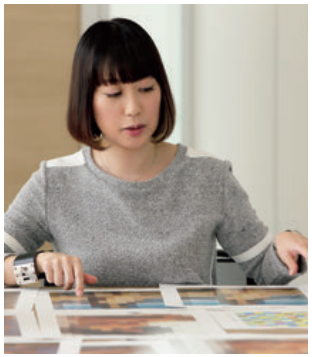
印刷は物質的な面白さがあるせいか、彫刻や工芸ととても近いように感じます。1枚の紙にいろいろなテクスチャーを入れ込むことができて、最後にディテールを詰めていく楽しさもあるし、絵の具を選ぶようにインキを選ぶこともできます。すべての情報はモニターで伝えられるかもしれませんが、ポスターという物質になることで、それ以上に美しくなることができます。言い換えれば、さまざまな印刷手法があるからポスターはより美しくなることも、強いインパクトを与えることもできるのだと思います。

印刷が担うものも大きいですね。

たとえば印刷会社がどんどん新しい手法を提示してくれたら、その刺激を受けて私たちは絵の具のようにそれを使って新しい何かを生み出していけます。クリエイターの想像力を印刷が掻きたててくれれば印刷物もポスターも永遠になくならないと思います。物でないと伝わらないことはたくさんあります。そのためにも印刷はなくてはならない画材のようなものですね。

最後に、来場者へメッセージを。

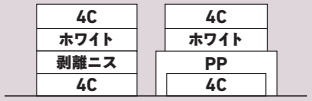
今回はいろんな印刷手法を駆使して作った作品で、写真やネット上で見ても面白さが伝わらない表現にチャレンジしています。ですから会場では近づいたり離れたり、角度を変えたりしながら見てください。実物だからこその面白さをぜひ体感してください。

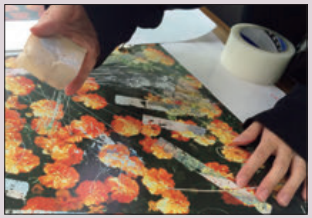


Point of Trial
トライアルのポイント

「剥離する印刷」へのトライアル

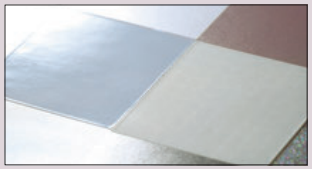
触れると剥がれる印刷を目指した実験。印刷した絵柄の上に白インキやP.P.加工によって剥離する層を作り、その上にさらに絵柄を刷ることで、下層の絵柄を傷めずに表層の絵柄のみを剥がすことができた。



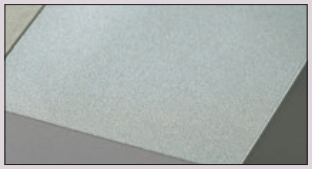


シルクスクリーン印刷による さまざまな質感

剥離層を作るための印刷実験で出来たさまざまな質感に着目し、最終作品はモザイクのパターンを面ごとにディテールを変化させて表現した。質感をわかりやすく表現するために最適な印刷方式や刷り順、インキの調合に工夫を凝らし、モザイクごとにさまざまな技法を当てはめた。

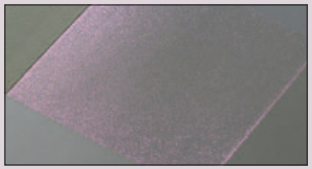


ツヤとマット：際立った光沢感の違いは
UV厚盛りのグロス（左）とマット（右）で表現。



ざらざら：メジウムにウレタンの粒子を
調合したインキを用い、ざらっとした手触りの
テクスチャーを作った。

モコモコ：発泡インキを使用。
熱で膨張する微粒子カプセルを混ぜたインキを
下地材として用いて立体感を生み出した。



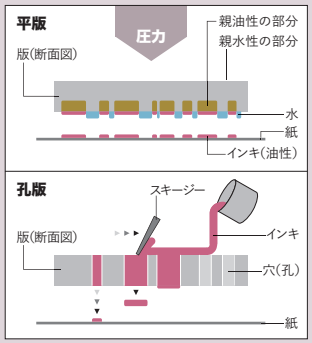
キラキラ：偏光パールインキを使い、
光の当たる角度によって見え方の変化する輝きを
演出した。

色表現と質感表現で 印刷方式を使い分ける

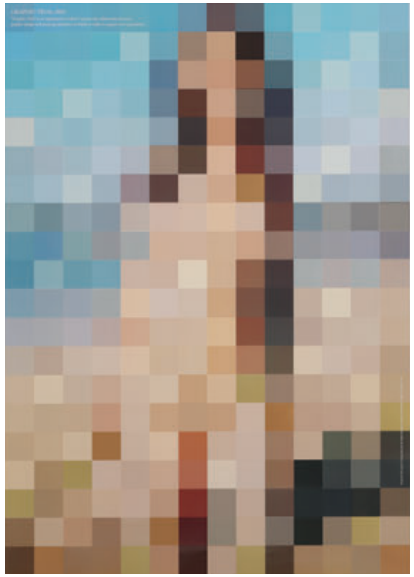
質感をより際立たせるために、二つの印刷方法を組み合わせて使った。絵柄部分はオフセットで印刷し、質感の表現にはシルクスクリーン印刷を用いた。

オフセット印刷の利点
色調が豊かで再現性に優れ、文字などを明瞭に再現できる。

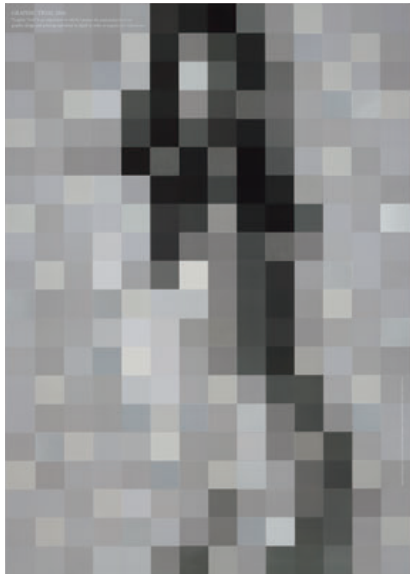
シルクスクリーン印刷の利点
インキを厚く盛れることや、細かな粒子をインキに混ぜることができるため、さまざまな質感表現が可能。また、性質の異なるインキを用途によって選択することで、さまざまな素材に刷ることが可能となり、さらに、印刷面の質感も変えることができる。



1

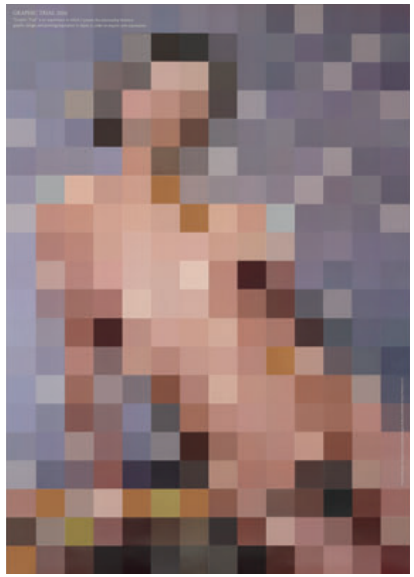


2



3

4



5

1,4　印刷方式[色数]——シルクスクリーン印刷[1]+
H-UVオフセット印刷[6]+
シルクスクリーン印刷[5]
スクリーン————100メッシュ、AM175線、225メッシュ、
150メッシュ
用紙————ヴァンヌーボ スムース-FS 135kg

3　印刷方式[色数]——シルクスクリーン印刷[1]+
H-UVオフセット印刷[5]+
シルクスクリーン印刷[5]
スクリーン————100メッシュ、AM175線、225メッシュ、
280メッシュ
用紙————雷鳥スーパーアートN 135kg

2,5　印刷方式[色数]——シルクスクリーン印刷[1]+
H-UVオフセット印刷[7]+
シルクスクリーン印刷[5]
スクリーン————100メッシュ、AM175線、225メッシュ、
150メッシュ
用紙————ヴァンヌーボ スムース-FS 135kg